毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第16巻　第5号　1971年5月25日　大町山岳博物館

代掻馬と白馬岳　1957年5月　白馬村四ツ谷にて　　撮影　海川庄一

雪形と農耕

八十八夜の頃になると白馬岳の三国境の直下、信州側の山肌に黒い駒形が現われる。それは残雪が山肌に描いた雄壮な絵であり、麓の四ッ谷（白馬町）あたりから見ると大変すばらしい。かって麓の人々は、この雪形を目安に田の代を掻いた。そしてこの山を代掻馬の現われる山の意味で代馬岳と呼んできた。だから白馬岳の由来はシロウマ、それも黒い代馬である。

大町でま近かに望める爺ガ岳には同じ頃、笊を持って種を播く種播爺さんの雪形が現れる。山麓では毎年種播爺さんが出ると苗床の種播きにかかった。

こうした雪形の話が麓の農民の間に古くから語り伝えられて来たことには、それなりの理由があったようである。残雪の形として現われる消雪の進行状況は里にいて山の季節の進み具合を見る最も良い目安であった。山里の気候は「岳」の気候に左右される。高山に融雪の春が来てはじめて山麓の気候も定まる岳の冷い雪融け水が一気に苗代に入ってはまずい。百姓は気温が安定し、水がぬるむ日をじっと待った。そして雪形に教えられて、農事をその年の季節の進行に合わせたのである。そこには、機械力と薬品によって自然を制圧する文明はなかった。あったのは、自然に順応した生活の知恵であり、人間と自然との豊かな対話であった。

「田が植わったぞ」と声高く告げているという白馬乗鞍のニワトリの雪形を、大田植の日田の畦でキナ粉むすびをほうばりながら母から教えられたことを、筆者はいま、少年の日の忘れ得ぬ記憶の一つとして想い起す。

北アの麓はいま田植が盛である。野良に代掻きの馬の姿は見られなくなり、種播き爺さんの雪形の出ないうちに種を播くようになった現在ではあるが、生活の中で自然を肌で感じる機会を失いたくないものである。（海川）

北ア山麓地方の稲作慣行

青木 治

私達は米を得るため、弥生の昔から、あらゆる知慧を働らかせて、厳しい自然条件を克服するため、科学の力や信仰の力を巧みに、利用して、その土地、風土に適合させて、稲作りに専念して来た、そしてその土地独得の稲作りの風習をつくって来たものである。

一、苗代

苗半作といって、苗代田における育苗は、農家では、昔から非常に大切にしていたもので、その間における祈願、禁忌、呪法など多人を数えている。

(1) 浸種

種籾は池か川に叺か俵に入れて浸してきたが、俵の場合は特別に小さなのを編んで作ったものに入れて浸した。最近は桶浸しやたらい浸しにするし、馬鹿苗病予防のためウスプルン消毒もする。催芽の方法も、風呂湯やもろの利用から、更に電熱利用まで発展した。

(2) 種播き

1、種播きに祀る神

春谷川の上流から、流れに添って、水とともに苗代田に移動する田の神信仰の主は、当地方では、豊受大神とか、西宮大神（恵比寿神、大黒神）とか猿田彦大神という。また戸隠様やお伊勢様、時には産土様も作神様とする。

苗代に来た田の神様は、苗代をしめた時に柳（あるいは水ぶさ）の枝を三本（五本のところもある）苗代の真中に挿す（大町以南）あるいは三mの等間隔に挿し（大町以北）、これを「たなんべ」とか、「たなんぼ」とか「田の神様の腰掛け」などという。田植が終った時に、この「たなんぼ」の周りの苗を三把取り残し、大田植（田植が終った時の夜のお祝い）の時に、小さく握った飯を苗につつみ、三把にして、恵比寿棚に供える

「たなんべ」 昭和28年 池田町会染十日市場

また苗代の水口（みなくち）に柳の太い枝でつくった抗棒（一月十四日の若年の時に長さ二五cm太さ径四cm位で、上を十文字に線を入れ少し割る）二本挿し焼米（苗代に播き残しの米でつくる）を抗棒の上に少し供える。あるいは苗代の水口へ一升のお米を、三ケ所に少しづつあげる家もある。また苗代をしめた時（整地の時）しめ餅を搗くが、餅草か、ちちこ草かで、草餅にし芽が青々と出るようにといって、家にある西宮大神宮、大国主神に供える。

これ等の行事は何れも、発芽がよく、立派な苗が育つようにとの、田の神信仰の表れである。

2 浸種、播種に良い日、悪い日

種籾の水に漬ける日は、四月十五日の諏訪の西祭の日か大安の日がよい、また午、子、己の日に漬けると、良く実のり、良くねまるという。或は四月の始めの酉の日もよいが、申の日にほとばせば、苗が赤くなるという。

播種に良い日は、大安、先勝の日や八十八夜や一粒万倍の日が良く、寅、己の日も吉であるという。悪い日は、奇数日、仏滅、九日である。丑の日に播けば、午のように稲がころぶというし、戌の日に播けば、苗が犬の毛のように細くなる。未、亥卯の日も凶である。

しかし子の日に播けば根付きが良いという家もあるが、この日に播けばねえばを引く（田植の時に苗が細て葉先が枯れる）といって嫌う家もある。また大安、酉の日に播けば良い苗になるというかと思うと、酉、未の日に播くのは凶であるという者もあって、子と酉は良否両方に属している。

これ等の話は思付き的、迷信的のもので、科学的根拠はない。

3 消雪と田仕事

北アルプスの山麓に種播きが、初まると、爺ケ岳の種播き爺さんが種籾を入れた笊をもって腰をかがめながら、すじ播き（種播き）を初める形が表われる。また白馬岳でも麓の人々が代掻き車を馬に引かせ、代掻きを初める頃になると代掻馬の消雪の形が表れて、百姓達に一段と忙しさを知らせる。今は苗代のビニール栽培時代なので、田植が一ケ月余り早く、季節の標準とはならない。

4 苗代田の条件

土地の肥えた、然も水便が良く、水が永持ちし、北風があたらない、日あたりの良い、家の近くで、管理に便利な場所であることが条件である。更にその上、家よりの方角を老人達は考えたものである。播種に際しても、不幸に参加した人や、女人は忌まれた傾向があった。特に神撰用の稲はそうである。

13車（ひどろ用） 大町市平区稲尾

5 苗代ごしらえ前後の行事と特別食

苗代田の整地を苗代しめという、苗代しめが終ると柳の小枝三本を苗代の中央や、或は苗代全体に等間隔に挿してこれをたなんべとかたなんぼとかいい、田の神様の苗代を守る場所とする。この柳が芽吹いて付くと、その年の苗は吉兆があるとし、枯死すると、苗も、またその家にも不吉があるとして嫌う。苗代をしめ終って、家に入る時の泥足は、必ず冷い水を用いるもので、お湯で洗うと鳥が苗代を荒すと言われる。尚佐野坂以北では、柳の代りに桑棒や麻柄を代用する家もあった。

五月二日か三日の八十八夜の日か、苗代の整地が終った時に釜めしをする。その晩は家中で、特別食を作り御馳走をする。ごもく飯お寿し、あるいは卵をゆでたりなどし、お神

酒を田の神様に供え、酒肴をととのえ、時にはお手伝を頂いた近隣の者も集ってお祝をする。するすると仕事がうまく行くようにとか稲作をすり拡げるという意味で特に芋汁を御馳走する家もある。またおはぎやしめ餅といって、草餅を搗き、草餅のように苗が青々と育つようにと祈り、田の神様に供える家もある。

隣近所の数人の子供仲間だけの釜めしも、昔はよくやったものである。

二、田植

田植は農家では最大の仕事である。田植こそ、農家では一年の生活を托しているので、農業技術や行事も種々である。

(1) 田起し、代掻き

昔は総べて人力である。幼稚な道具で、木製のものに、鉄の犂先、鍬先を入れた。犂や鍬で田起しをしたが、明治に入ると三刃の万能鍬が主力となり、一鍬一鍬手に豆を製造しながら、朝から夕方まで、万能を振上げる、田打ちが初まるのであった。明治も半過ぎる三〇年代に入ると、畜力の利用が進み、田起しも抱えもつたて犂が導入され、馬耕に変ってきている。馬具にもはも、馬耕鞍、力綱も立派になり、能率は急増している。その中明治、大正、昭和と時代を経るにしたがい、各種の改良犂があらわれ、馬耕、牛耕と畜力万能時代に入って来る。更に現代では耕耘機による機械力の時代に入って来ている。

代掻きも最初は総て人力であったが、漸次に畜力利用に発展して来ている。明治から大正の初期頃までは、水田肥料は山野の若葉を小枝ごと田に犂込む、刈敷肥料であった。五月の終り頃若葉が出ると、農家では附近の刈敷山に出掛け刈敷を取るのであるが、男は馬を引き、幾回か山と水田の間の馬ねぐりに専念したものである。田起しが終り、田に水を張り、刈敷が全面にまかれると、田踏みが行われる。大足（おおあし）と称せられる、大きな田下駄で刈敷を踏込みながら代掻きをするか、または裸馬を小田中を廻しながら、馬の足と人間の足で田踏みをしたが、畜力利用が進むと、こんぺと車（初期のもの、歯は木製、後鉄製）で荒踏みを行い、中踏と代掻整地は一三車（代掻車）で丁寧に代掻をし、え振りで仕上げた。ひどろ田（湿田）では、最近まで、大足を使っていた。然し現今では機械力によっている。

肥料も明治の日露戦争後の頃から化学肥料を施用し、漸次に収穫量を上げて来ている。れんげ草の導入は明治以前であったようであるが、明治から大正にかけ、水田の有機質肥料の王者となり、また安曇野の春の風物となったが、今はそこここに僅かに残っている程度である。

大足（おおあし）北安小谷村中土　昭和28年6月14日撮影

(2) 田植の日取り

苗日ということがある。種播きから田植までの稲苗の苗代期間をいう。一番短いのが、三三日で長いのが五〇日であるが、普通は四〇日前後が適当で、昔から苗四〇日という、処が一番多い。佐野坂以北と以南および美麻八坂の東部山地により、多少の相違があるようである。この苗日により田植の時期を決定している。

(3) 田植を忌む日と田植の吉日

子、未、亥の日は悪く、申の日に田植をすれば、苗が枯れて赤くなるという。仏滅や四九の日を嫌う、特に六月一六日はお伊勢様の田植といって、一日中田のなかに入ることを禁じ、また六日田を植えるものでないといって六日の田植を嫌っている。

大安、友引、一粒万倍の日は良く、一三日一五日、一八日も良い、また六月の酉の日に田植を初めると、取込むといって良いという人もあるが、鳥につかれるといって嫌う人もある。

(4) 大田

大田植ともいう。この意味は二通りに使われている。田植の中心日で、一番盛んに行う日という意味と、田植を完了した最後の日という意味とである。

水田の整地が終ると、田植が初まる、多くは小びる前に苗取りをし、小びるが終って田植をする。昔は目見当で、畦間、株間をきめまがり八石などといって、適当に植えたものであるが、大正の終り頃から、縄張の正条植が初まり、更に正条框が越後方面から伝わり正条植ができるようになった。男の仕事として、框ころばしが加わったものである。

田植の大切の日の大田植の晩には、どこの家でも、田祭をいわうか、田の神様を祀る。この日には餅を搗いたり、竹の子や焼鯛を用意したり、芋汁をつくるなど御馳走をこしらえる。田の神様（西宮大神宮）には田なんぽ（苗てんぽ）の周りの苗を取って来て（あらかじめ残しておいたもの）苗を三把にし、その中におむすびを入れ、三つをそれぞれにくくりお神酒やお燈明と一緒に供える。その晩は家中で田植祝いをする。この苗の中に入れたお握りを後で主人が食べれば、稲穂が茂げるというし、子供が食べると髭が出るというまた味噌に入れると良い味噌が出来るし、誰れが食べても、夏中健康に過せるという。またその苗を焼いて、耳だれや口あれに付ければ良くきくという。

田植布子　平昭和28年6月4日撮影

(5) 田植の俗信

稿苗は作神様の苗で、この苗が多く見られる年は豊作であるというし、稿苗を多く見つけた人は田植が上手に早くなるという。一日に七本稿苗を植えりゃ長者となるとか、見つけた時に人に知らせず、黙って植えると福の神が来るとか、稿苗は縁起の良いものとされている。また田植が初まったら風呂を立てない、立てればねーばを引くという。腰が痛ければ人の見ないうちに、苗を倒さに三株植えると痛みがなおるというし、つき手（こうで）をふせぐには、田植の初めの日に水口に苗を倒さに二、三本植えておくとよいという。

以上浸種から田植までの仕事と行事を、主として風習の面から記して見たが、まだおちが多いと思う。お気付きの点があれば、一報お教え下されば有難いと思う。なお機会があれば収穫までの慣行を書いて見たいと思う。

（北安誌編さん委員、穂高町有明五九六六）

大町市内の探鳥コース

長沢修介

大町市は四方を山に囲まれた山里であってちょっと市街地を出ると田園風景の中に多くの小鳥が見られ、大都会の雀一羽さえ見られない環境とは大きな差があるが、近年その農村地帯も住宅地と化した所が多く、平地の原野はもう消えてしまった感じである。数年前のように庭先に小鳥の営巣を見ることはまれになってしまった。全体的に見て小鳥の数は減少の一途であるかどうかは、はっきりしたデーターを待たねば結論ずけられないが、市街地で見られる小鳥の種類が減少したことは否定できない現実である。そこで当地で比較的多くの種類の見られる場所を紹介してみたい。まず市内で大きな樹木の残っている場所といえば**若一王子神社と竜神社**の二つの神社であるが、昨年あたりまでは早朝フクロウの鳴き声が聞かれ、数年前まではクロツグミの囀りが遠くまで聞くことができたのに今年は両者共姿を見せずじまいになりそうである。大木に営巣するムクドリやコサメビタキ、人家附近のキセキレイ、ココワラヒワといった鳥のみとなってしまった。

次に手軽で比較的多くの小鳥の声を聞くことのできる場所としては**東山公園一帯**である。コースとして選ぶには松崎地籍から公園まで、公園から三日町まで、霊松寺までと三つあるがこの三つを組み合わせるとハイキングもかねられ、当地方に棲む大半の小鳥の声も聞くことができる。特に公園一帯は現在の山岳博物館ができてから裏山を自然園として樹木を保護しているので、近年小鳥の数が多くなったようである。明るいカツ葉樹林に棲むシジュウカラやクロツグミ、キビタキ、ホホジロといった種が早朝から美しい鳴き声を聞かせてくれる。三日町迄の道路、霊松寺迄の道にはオオルリ、ノジコといった美声の鳥も出現し、子供づれで早朝の出勤前などに新緑の香を胸一つぱいに吸いながら、雄大な北アルプスを一眺のもとに美しい小鳥の囀りを聞く場所としては一番手頃で良い場所である。

次に一日のハイキングとして、又は山菜取り等もかねてというコースを三つ程紹介しょう。

第一は大町の上水道の水源である居谷里である。特に良いのは**居谷里の水源池附近**とここから少し入った大町一番地の湿原帯附近である。コースとして取るのには居谷里水源地のバス停から水源地に下り湿源を経て一番地を通り、稲尾部落に出るコースである。ここは水源地が立入禁止で大きな樹木があるためシジウカラ、ヤマガラ、キビタキ、サンコウチョウ、ノジコ、ホホジロ、ウグイス、オオルリ、クロツグミ、センダイムシクイ、といった森林の代表的なものから、池があるので、カワセミ、バン、カルガモといった水辺のものまで出現し、ホトトギスの仲間はカッコウ、ツツドリ、ジュウイチ、ホトトギスと全部が鳴き競う。10年程以前にこの地で一年を通して鳴きを観測したことがあるが朝から夜を通して小鳥の声は絶えなかった。夜はホトトギス、ジュウイチと声のブッポウソウといわれるるコノハズクも出現し、早朝と夕暮には湿原帯でオオジシギの雷のような声も聞くことができた。又、ミズバショウ、クリンソウ、サクラソウと美しく咲く花も多く場所も手近で良い所である。近年水源地から湿原附近の木が切り払われてしまい以前のようにコノハズクやオオジシギの声はなくなってしまったがまだまだ他の地に比較して多くの声を聞くことのできる場所である。

次はコースは長くなるが**鹿島部落より大谷原、鹿島槍国際高原**である。このコースはバス道路を歩くためなるべく早朝のうちに歩きたい。このコースの良い場所は鹿島部落を過ぎた鹿島神社、及びモビレージ附近、鹿島槍国際高原への分岐点附近、鹿島槍高原でモビレージ附近はバス道路からはずれて川原に出る道もあるのでこれを利用するとよい。この附近は、アカゲラやコゲラなどのキツツキの仲間、ホホジロ、ノジコ、オオルリ、キビタキ、ウグイス、シジウカラ等森林の鳥が手近な所で囀るのが見受けられ、コルリ、ヒガラゴジウカラといったブナ林の鳥の出現もまれではない。分岐点附近は雄大な鹿島槍を目前に見ながら新緑の梢で囀るホホジロやカッコウの姿がながめられ、又鹿島川を上下するカワガラスがそして運が良ければ数少ないヤマセミも見受けられる。鹿島槍高原に登るとキョロン・ツーと一声ずつ鳴くマミジロやコマドリと聞き違うような鳴き方のコルリが手近な場所で囀り、爺ケ岳が大町で眺めるとは異った急峻な岩肌に残雪をつけてそびえ立って里は新緑でもまだ山桜の時である。ビンズイが歌いオオアカゲラが飛び交う場所である。

最後にもう一つ、仁科三湖の最北の**青木湖西岸から佐野坂の分水嶺**を通り白馬村神城へ出るコースである。このコースは青木部落を過ぎて昭電発電所の取入れの次の出島となったキャンプ場とエビスマ原のキャンプ場附近青木湖北側道路と旧千国街道の分岐点附近が最も多くの鳥が見られる。出島となったキャンプ場は朝の明け方など鏡のような湖面を渡ってカッコウやホトトギスの声が対岸から聞え、山側からはオオルリ、サンショウクイ、シジウカラの声にまじってメジロの声も聞かれ早朝のねむ気も一気に飛んでしまう。エビスマ原附近は唐松の林にホホジロやノジコが歌い、数少ないニュウナイスズメもぽつぽつ出現する。湖の北端近くの杉の林にはクロツグミやキビタキが美声を聞かせ、ドラムを打つようなアカゲラのトラッピングも聞かれ、湖面で飛び上る魚の音も聞かれる静けさである。分水嶺の佐野坂はシジウカラ、コガラ、ウグイス等が囀り、佐野部落近くなるとホホジロやノジコの声にまじってチゴモズも出現する。又姫川が近ずくにつれオオヨシキリのはげしい声が一段と高くなる。

（大町山岳博物館調査員）

コゲラとその巣

小鳥の声を聞く会

とき 六月六日（日）午前四時

コース 大町駅前出発 大町駅前（バス）―青木部落（徒歩）―湖畔道路―佐野坂―佐野坂スキー場

集合場所 大町駅前・マルナカ洋品店前カネマン前・追分・平小学校入口。

山と博物館 第16巻第5号 一九七一年五月二十五日発行
発行所 長野県大町市TEL②〇一一一 大町山岳博物館
印刷所 大町市下仲町 大糸タイムス印刷部
定価 年額 三〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一二三、二九三）